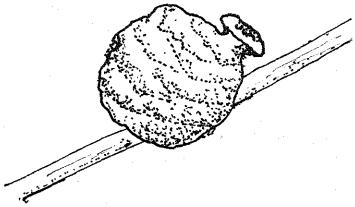
土をこねて（？）巣をつくるハチ

高柳　芳恵

昔アシナガバチに刺された経験から、ハチの巣にはあまり近寄らないようにしていたのですが、十数年前「トックリバチ」という変わった名前を持つハチに出会ったのがきっかけで、すっかりハチへの恐怖心がなくなりました。

このハチは、草の茎や枯れ枝に泥をかためて巣をつくりますが、その巣を一目見れば、何故この名前がついたかがわかるでしょう。巣は、土をよくこねてつくった素焼きの徳利、そんなイメージです。ですから、私は、「こねる」という言葉をきいて、すぐこのハチの巣を連想しました。

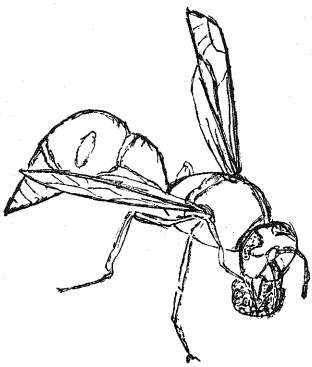
小さなハチですから、巣も直径一・五センチほどの小さなものです。でも、写真にとって「これ、私が土をこねてつくった土器。このくびれを



トックリバチの巣

形づくるの大変だったわ」といっても、疑う人はいないでしょう。かたむけると「とくとく……」とお酒がでてきそうなすてきな形です。

そんなすてきな巣は、たった一匹の子を育てるために作られたもの。ハチのお母さんは、卵を一個産みつけると、麻酔をかけて動けなくした数匹の蛾の幼虫を入れ、入口を密閉してしまいます。中では、卵からかえった幼虫が、蛾の幼虫をえさとして成長、さなぎから成虫となって出てきます。



泥だんごをつくるトックリバチ

それにしても、どうしてボールではなくトックリの形をしているのでしょう。

「蛾の幼虫を運び入れるとき、くびれがあった方が、運び入れやすいわ」

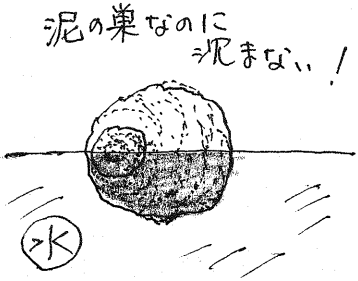
「それにくびれがなかったら、入口が崩れやすくて心配」

「最後に入口をふさぐのに都合がいいわ」

そんなハチのお母さんの声が聞こえてくるような気がします。

ところで、このトックリバチの巣が泥でできているにもかかわらず、雨風のあたる草っぱらにあると知ったら、ちょっと心配になりませんか。

私は、秋に見つけた巣がどうなるか様子を見ていたのですが、半年たってもこわれることなくそのままでした。そこで、家に持ち帰り、水を入れたコップにそっとおいてみました。すると半分水



に浸かった状態で浮かびました。待つこと、一時間、二時間、三時間、……半日たってもそのままでした。そこで、巣を水に入れたり出したりをくり返してみました。それでも形はくずれません。巣はしっかり作られている上に、完全防水型だった（！）のです。

その数年後、バスを待っていた停車場の斜面で、見覚えのあるあのハチが、巣の材料となる泥のだんごをこしらえている場面に幸運にも出くわしました。まわりの土は乾燥しているのに、泥だんごはしっとりとぬれていました。ハチが口から液を出して、土とこねあわせていたのです。この液こそが、ヒミツを解く鍵に違いありません。人間が作る土器は、どんなにていねいに作っても、焼かなければ、使いものにならないというのに。自然の仕組みの巧みさにすっかり感心してしまいました。

しかし、これだけではありませんでした。ある日、巣に穴をあけてトックリバチが出てきましたが、その時も、液を使っていたのです。かたい壁を柔らかくするために。見事に丸い穴でした。

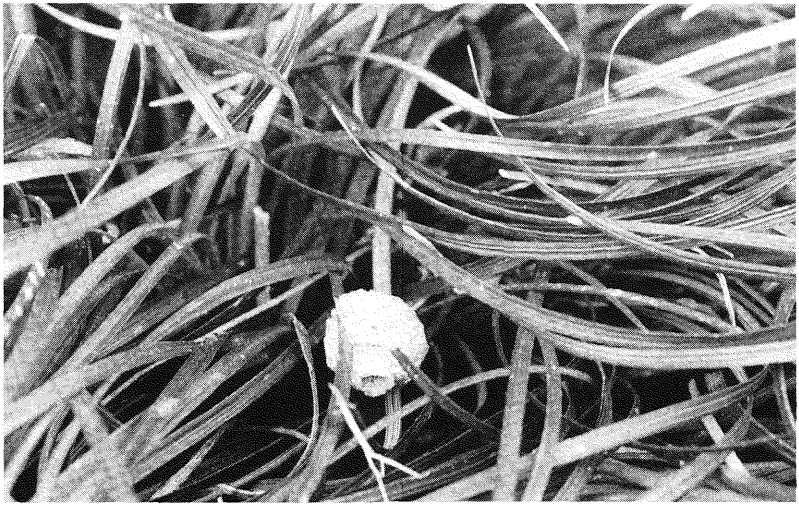
さらに、ハチが出たあとの巣を分解して、また驚いてしまいました。

凹凸のある巣の外側とは違って、内側の壁はろ

くろを回したようになめらかでした。そして、そこには生きたまま餌となるのを待っていた蛾の幼虫がしたと思われるフン、成長していくハチの幼虫がしたと思われるフンがくっついていました。しかも、それらはひからびて小さくなっていたのです。つまり、この巣は、水は通さないけれども、通気性はあるということになります。もし、密閉された狭い空間で、水分を含んだフンが放置されたら、カビがはえたり、場所ふさぎになったかも知れません。さなぎになるのも容易ではなかったでしょう。

子どもが自力で成長するための環境づくりに最大限の努力をして、あとは振り向きもせず去っていくハチのお母さん。小さなハチの大きな仕事に、脱帽！

（ナチュラリスト）



▲今年の一月に見つけたトックリバチの巣。歩道わきの下草、リュウノヒゲの細長い葉につくられていた。四月七日、無事成虫が誕生。